

## 日本消化器外科学会編集後記

私は平成 22 年 9 月から本学会の会誌編集委員会委員として編集業務に携わることになりました。今年の 1 月から機関誌が医学系和文誌では本邦初の電子媒体化となり、毎月『J-STAGE』で電子版として発行されています。電子媒体の利点が多いことは感じていますが、個人的にはその条文がやや読みづらく、またメモ書きができないなどの理由からつい紙媒体で査読をしています。

今月号は原著 3 編、臨床経験 1 編、症例報告 15 編で合計 19 編の論文が掲載されています。年間を通じて、原著論文がやや少なく症例報告が多いことが問題点として取り上げられています。しかしながら、これらは一般病院からの掲載が多いことや若手の登竜門的な存在であることも理由の一つであろうと思われます。外科医不足で若手が過酷な労働環境でありながらも、貴重な症例経験を一例ずつ論文報告していくことの熱意と、責任者の教育的指導の成果と思われます。著者やその指導をなされた先生方に敬意を表するものであります。

編集委員になってからの一年を振り返りますと、あまりに深刻なニュースが多いことに驚いています。3 月 11 日に発生した東日本大震災では、被災地の一日も早い復旧・復興に全力を挙げて取り組んでおり、住宅・生活支援から心や身体のケアまで復興対策を全力支援している最中ですが、福島第一原子力発電所の事故に関する報道は、今もなお連日報道されており事態の収束に至っていない状況であります。放射性セシウム汚染の牛肉流通問題や農作物の放射能汚染、原子炉建屋内からの極めて高濃度の放射能漏れや電力不足など、5 か月が経過した現在でも多くの問題が浮上し、解決どころか悪化しているようにさえ伺える状況です。そのような中で、8 月 2 日には地元である栃木県産の肉牛の出荷停止が報道され、福島県、宮城県、岩手県に次いで 4 県目となり、栃木県においても死活問題となっています。ちなみに栃木県にはまぼろしの和牛と呼ばれる大田原牛があります。これは松阪牛や米沢牛のような産地をあらわすブランド肉ではなく、那須の専用農場で精魂込めて肥育された黒毛和牛の中から、厳選した風味豊かな最上級の和牛を指します。栃木県は地震による被災に加えて原発事故の被災地ともなり、検討すべき今後の課題がさらに増してきたことが伺えます。

最後に、今年一番の朗報は、『なでしこジャパン』のワールドカップ優勝でしょう。日本中に感動と勇気を与え、被災地の皆様にも期待以上の希望のメッセージが送られたことでしょう。日本中の誰もが感動し、涙すら浮かべるほどの活躍であったと思います。あの神がかり的な快進撃は瞠目に値するものがあり、国民栄誉賞の受賞は日本国民が望んだことだったでしょう。今後はプレッシャーを心地よい力に変え、国民の期待に応えていくことを楽しんでいただきたいと思います。思う次第です。

(加藤 広行)

2011 年 9 月 1 日